

## 2. 研究の詳細

プロジェクト名	発表者視点によるリフレクションを通じた大学生のプレゼンテーション技能の育成		
プロジェクト期間	平成24年度（当初の計画が遂行されたため、申請期間を短縮する。）		
申請代表者 (所属講座等)	松尾 剛 (教育心理学講座)	共同研究者 (所属講座等)	杉村智子・友清由希子・黒川雅幸・生田淳一 (教育心理学講座)

### 1. 問題と目的

自分の考えを他者に伝えるプレゼンテーション能力を学生に獲得させることは、高等教育における主要な教育目標のひとつであると言えよう。その能力は、社会生活全般において求められるジェネリック・スキルであり、また、本学のような教員養成大学においては、教員となる学生が身につけるべき重要な授業実践技量として位置づけることもできる。そこで本研究では、説明を主とした学生のプレゼンテーション能力を向上させるための介入の手だてを探索的に研究することを目的とした。

説明のわかりやすさを規定する要因は多岐にわたると想定できる。例えば、説明に用いている語彙の明確さ、目的との適合性、話の論理的、内容的まとまりなどである(岸・谷口・綿井,1990)。また、説明を受ける側の既有知識や概念との一致の程度や、どのような説明を適切な説明であるとみなすかといった認識論的信念や社会文化的な規範なども広く想定できる。これらはどちらかと言えば、説明の中でも、言語として表現されている側面に注目したものであると言えよう。

一方で、言語的な説明においては非言語的な情報も重要な機能を担うと考えられる。例えば、説明の中で意図的に用いられる沈黙（間）、パラ言語的な情報、説明者の姿勢（e.g., 野中, 2011）や、視線（e.g., 有馬, 2009; 伊藤・関根, 2011）などが含まれる。特に、後者の非言語的な側面が説明において担う機能については、説明者自身が意識しにくいと想定されるため、説明の技術を学生に獲得させるためには、単に繰り返し説明を体験させるという以上に、何らかの特別な介入が必要であると考えられる。そこで本研究では、言語的な説明の過程における視線配分への意識を高めるリフレクションの方法を検討することを試みた。

具体的には、学生に小型のビデオカメラを頭部に装着させた状態で説明を行わせることで、説明者の視点から撮影された映像を録画する。そのVTR映像を分析することで、まずは学生が説明過程で実際にはどのように視線配分を行っているのか、記述的に特徴を明らかにする。これが本研究の第一の目的である。さらに、本研究の第二の目的として、このような説明者視点から撮影されたVTRを用いてリフレクションを行うことで、学生にどのような省察が促されるのかを検討する。本研究の背景には、本学における教育の主要な目的でもある、教員としての技量の育成という観点がある。そこで、これらの本研究の結果について、教育の現場における実践技量の向上や、大学における効果的な教育実習のための手だてとしての応用可能性について考察を行う。

### 2. 方法

#### (1) 手続き

2012年度後期の期間において、代表者が実施している心理統計の自主学習会においてデータ収集と調査を行った。参加者は教育心理学選修に所属する学部2年生11名（全員女性）であった。毎回の学習会の流れは、2名の代表者が担当する部分について板書や資料を用いながら説明を行い、その後、適宜、教員が解説を付け加えたり、フロアからの質問に答えたりするというものであった。毎回の活動は90分程度であった。この活動の中で、発表者には頭部に小型のビデオカメラを装着した状態で説明を行うように求め、映像を撮影した。また、初回の調査時には、学習会を実施した直後にVTRを参加者全員で視聴しながら、各自が気づいたこと、感想、学んだことなどについての自由記述を学生に求めた。初回の調査時を選択した理由は、調査の意図が推測されてしまうと、そのことが自由記述の内容にバイアスをかけてしまう可能性が考えられたためである。

### (3)分析方法

#### ①学生の視線配分の特徴についての分析

機材の不具合により分析可能な映像が撮影できなかった回を除く、3回分のVTRデータを今回の分析対象とした。説明過程における学生の視線配分の特徴を記述するという本研究の目的をふまえ、特に、学生が説明を行っている最初の部分（毎回約3～5分程度）を分析場面として選択した。また、発表は2名で行われたが、1人が主発表者として中心的に説明を行い、もう1人が補助的な役割として板書や資料提示などを行っていたため、主発表者のVTRを分析対象とした。分析対象となった映像について、学生が視線を向けている対象を1/10秒単位でカテゴリー分類し、その時間を計測した。

#### ②説明者視点のVTRを用いたリフレクションの効果についての分析

初回の調査時において学生に求めた自由記述の内容について、記述が含む内容のまとまりごとに分割して、1つの内容についての記述を1分析単位とした。その結果、自由記述の内容は全47項目の記述に分類された。これら47項目の記述について、①何についての記述か、②どのような内容についての記述か、といった観点からカテゴリー分類を行うことで、VTRによって促される省察の内容を整理した。

## 3. 結果

### (1)学生の説明過程における視線配分の特徴

学生の視線配分の推移過程を図式化したものをFigure1～3に示す。

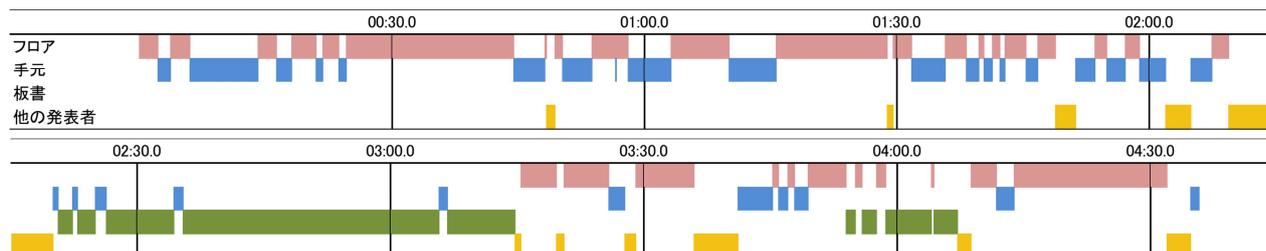


Figure1 視線の推移 (第1回)

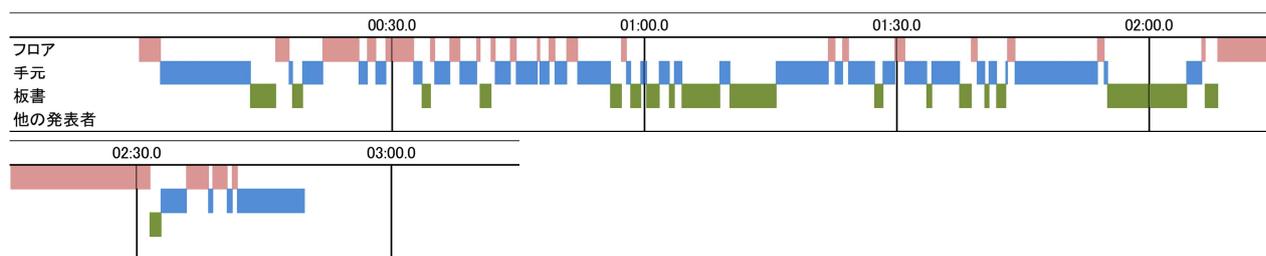


Figure2 視線の推移 (第2回)

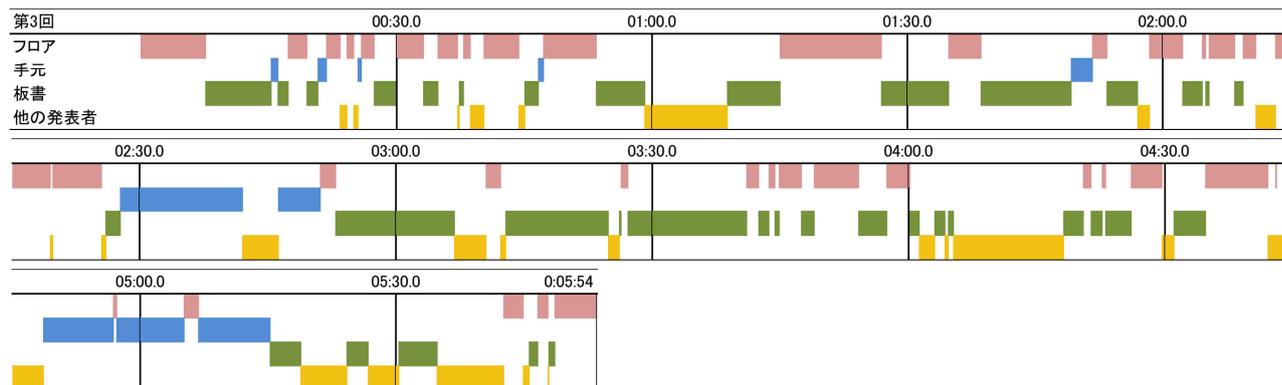


Figure3 視線の推移 (第3回)

## (2)説明者視点のVTRを用いた振り返りの内容

学生の自由記述の内容をカテゴリー分類した結果を Table1 に示した。

Table1. 自由記述回答のカテゴリーと回答例

### 1. 原稿のまとめ方の良さ (4)

- ・手元の資料がコンパクトにまとめてあり、プレゼンの準備がしっかりされている。
- ・手元の資料は、聴取者の必要に応じて対応できるように自分がわかるようなものにされているのだろうと感じた。

### 2. 発表者の視線について

#### ①視線の動きの頻度 (1)

- ・話している時は視線があちこち動き回っていたが、話しているときは、あまり動いていなかった。

#### ②資料への視線配分 (6)

- ・周り(授業を受ける人)の反応が小さいと、資料とかに目が移りがちになってしまうと思った。
- ・基本的に手元とフロアを交互に見ている。

#### ④板書への視線配分 (3)

- ・視線を黒板に向けたい時は、自分も黒板の方を見ている。\*
- ・黒板の記入スピードに配慮しながら授業を進めている。

#### ⑤フロアへの視線配分 (12)

- ・なるべく聴取者の方を見るように気をつけてプレゼンしていると感じた。
- ・自分が思っているよりも、前を向いている時間は少ないのかなと思う。
- ・フロアの人がわかっていない顔を見ると、あまり視線が合わなくなる。\*

#### ⑥他の発表者への視線配分 (3)

- ・フロアの反応が薄いと、もう一人の発表者に助けを求めるように見る。
- ・他の発表者に了解をとりながら進めている。

#### ⑦発表者の視野の広さ (1)

- ・話している人は私が思っていた以上に全体が見える

### 3. 発表者の話し方や様子

#### ①説明の仕方 (5)

- ・言葉が決まっていない時は「えーっと」が多い\*
- ・少し落ち着きが無いようにも思えました。

#### ②質問の有効性 (3)

- ・質問を呼びかけることでフロアの人にも注意が向くので、理解の進捗を確かめられる
- ・質問をなげかけていて、みんなを授業に参加させている

#### ③フロアの反応による影響 (6)

- ・聴いている側の反応が全くと、話をどのくらいのスピードで進めてよいか話し手も不安になるということが、映像を通して感じられた。
- ・フロアの人がわかっていない顔を見ると、たてつけに話してしまう。\*
- ・聴取者の反応がないと困るだろう、というか、怖いなーと感じた

### 4. フロアの反応の薄さ (3)

- ・自分ではリアクションをしているつもりだったけれど、フロアの人々の反応が薄かった。
- ・授業を受けている人の反応が薄い

注1：( )内はそのカテゴリーの内容を記述した人数を示す。

注2：\*印は発表者が自分の発表のVTRを見て回答した自由記述であることを示す。

#### 4. 考察 (成果と展望)

本研究の知見からは、以下のような成果が示唆されたと考えられる。第1に、説明者の状態を記述するための指標としての視線の有効性である。今回の分析対象とした3回の授業は、回数を重ねるごとに複雑な内容になっていた。そのため、後半ほど発表者が言いよんだり、説明が止まってしまったりすることが多くなったが、それを反映するように、Figure1～3には、後半の授業ほどフロアに長時間視線配分を行っている回数が少なくなり、手元の資料や板書、他の発表者を長時間見たり、忙しく視線を動かす様子が記述されている。

第2に、発表者視点のリフレクションの特徴として以下の点を推察することができる。

##### ① “説明” という観点からの教材・教具への注目

例えば、「手元の資料は、聴取者の必要に応じて対応できるように自分がわかるようなものにされているのだろうと感じた。」や「黒板の記入スピードに配慮しながら授業を進めている。」といった回答に見られるように、教材や教具の役割や機能について、説明との関係から考察がなされている。今回用いたVTRの特徴として、いつ、どのようなタイミングで手元の資料や黒板に視線を配っているかが明確であるという特徴があった。そのことが、今回の説明における資料や黒板の意味づけへの注目を引き出したものと想定できる。小学校における授業実践へと議論を拡張するならば、例えば松尾・丸野(2009)が示しているように、熟練教師は板書を用いながら授業中の話し合いのつながりを可視化しているという特徴がある。このような板書の役割は児童にとっての機能という観点から論じられることが主であったが、今回の方法を持ちいることで、そのような板書が教師にとって担う機能についても検討を行うことが可能であると考えられる。例えば、児童の話し合いが停滞した状況で、教師が板書に目を向け、これまでの話し合いを振り返ることで、即興的にその後の展開の糸口を見つけていく様子などを明らかにすることができるのではないだろうか。

##### ②フロアとの相互作用への注目

本研究の目的は、説明者の視点に立った省察を促すことであつた。実際にVTRを用いてリフレクションを行ったところ、「自分ではリアクションをしているつもりだったけれど、フロアの人への反応が薄かった。」など、発表を聞いているフロアの学生が、自分の反応の乏しさに気づくことを促すという特徴も顕著に見られた。この点を踏まえると、学生の聞き手としての能力の育成という点においても、今回の方法の有効性が示唆されたと考える。また、そのように、フロアの反応がより明確にVTRによって示されることによって、「聞いている側の反応が全くないと、話をどのくらいのスピードで進めてよいか話し手も不安になるということが、映像を通して感じられた。」というように、話し手と聞き手の相互作用過程として説明をとらえるという視点も引き出されている。このような特徴は「質問をなげかけていて、みんなを授業に参加させている」というように、発問を内容の側面ではなく、聞き手の注意を引き出すという側面から評価している記述にも反映されていると考えられる。

##### ③説明者の感情状態への注目。

今回の自由記述の特徴として、説明者の説明の仕方やスキルといった側面だけでなく、説明中の感情の側面にも注目した内容が引き出されていた。例えば、「聴取者の反応がないと困るだろう、というか、怖いなーと感じた」「フロアの反応が薄いと、もう一人の発表者に助けを求めようように見る。」といったものである。近年、教師の仕事の特徴として、「感情労働」(emotional labor) (e.g.,Hochschild,1983) という点が指摘される。本研究で用いたVTRは、フロアの表情や反応の薄さなどのように、説明者が見ていたものを共有することで、共感することを促すという機能や、説明者の視線の動きの推移の様子を通じて、心情の状態を推測することを促すという機能があったものと推察できる。教師の仕事を支える感情制御(感情の適切な表出、活用、切り替え)の技量を促すためのリフレクションの方法として、本研究の知見を活用していく可能性が想定される。

○本報告書は、本学ホームページを通じて学内外に公開いたします。

○本経費により作成された成果物や資料等については、必ず全て添付願います。

○研究テーマが2ヶ年計画の場合は、本報告書を平成25年度審査会の判断材料の一つといたします。